

## 或る自由主義的俳人の軌跡

——高篤三について——

細井啓司

### はじめに

高篤三（こう・とくぞう）。彼の名は余り知られていない。けれども彼が東京大空襲（昭20・3・10）で罹災したということもあって、第二次大戦終結後しばらくの間、彼は結社誌や俳句総合誌でしばしば語られていた。結社誌では「芝火」「青芝」「春燈」、総合俳誌では「現代俳句」「俳句」など（註1）。ただこれら昭和20年代から30年代にかけてのものは、総じて個人的追想記的なものにとどまって、研究的にまとまったというものではなかった。その後しばらくの間、彼は語られること少な

く、俳句辞典類にその名が記載されることもなかった。彼が再び顧みられるのは昭和50年代に入ってからで、湊楊一郎、古川克巳、川名大らが彼に言及し始める（以下、敬称略）（註2）。この人達の作業は、高篤三の業績を昭和俳句のいわば戦前史の中に位置づけようとするもので、このころになると、例えば富士見書房版「現代俳句辞典」に彼の項が設けられる。とはいえ、それらにしても、彼の生年月日の不詳をはじめ作家活動期間、発表句数の不正確さなど、高篤三についての関係資料はかなり不備なまま。

本稿は、以上のような戦後の諸成果を踏まえながら、高篤三について今まで不明だ

った諸点を出来るだけ明らかにし、新資料の若干の紹介なども行つて、彼を可能な限りトータルとして把握すること、そして彼を俳人としてと同時に一文化人としても扱って、一九〇〇年代前半を生きたわが国の一文化人の軌跡を確めること、そうしたことへのささやかな試論である。

（註1）正岡容「高篤三断片」（芝火昭21・10）、岩佐東一郎「河童と荷風と」（芝火昭22・3）、藤田初巳「篤三・青柚子・幹介」（現代俳句昭23・1）、安住敦「春燈雜記」（春燈昭28・1）、「高篤三追悼特集」（青芝昭29・3）、藤田初巳「篤三と青柚子」（俳句昭31・1）、安住敦「柿ノ木坂だより」（春燈昭32・8）

など。ほかに単行本収録のものとして、正岡容『荷風前後』（昭23刊・好江書房）所載の「宇野信夫・高篤三と新浅草」、同『東京恋慕帖』（昭23刊・好江書房）所載の「浅草灯籠」など。

（註2）湊揚一郎「昭和前期の藤田初巳と高篤三」（俳句研究昭51・8）、古川克巳「体験的新興俳句史」（俳句ボエム連載）、川名大『新興俳句表現史論攷』（昭59刊・桜楓社）所載の「新興俳句作品年表」「解説」、『日本の文学』第四卷（昭63刊・有精堂出版）所載の川名大「新詩精神運動から戦争俳句へ」など。

## 一、その生涯と俳歴についての素描

### 1 その生涯

高篤三（以下一篤三）。本名、八巢篤雄（はっそう・とくお）。明治34年6月2日生れ（註1）。父、八巢辰太郎、母、同じみ。住居は東京府浅草区象潟2番地（昭和9年に2丁目7番地と地番変更し、現在は浅草4丁目44番地）、以後、転居することなかった。辰太郎は東京・日本橋の綿糸布

問屋に勤めていたといわれる。大正9年11月15日死去するが、生前の働きに対する店主の感謝の念厚く、その死に当っては多額の弔慰金が遺族に手渡されたという。そのため父の死後も経済的問題など全くなく、住居の付近に所有する家作からの家賃収入は、母子二人の生活を賄って余りあったことである。

篤三は、近所の富士小学校を卒業、慶応義塾商工部に入学するが、のち錦城商業学校に転じる。大正13年4月、明治大学専門部政治経済科正科入学、昭和2年3月同部卒業、同4月明治大学政治経済学部入学、同5年3月同学部卒業。家計が豊かだったためか、その後、定職には就かなかつたといわれる。

彼の一生に大きな影響を与えたのは畑耕一との出逢い。耕一は明治大学政治経済学部講師として文芸概論を受け持つと共に学内団体の文芸座談会の指導を担当、篤三はその文芸座談会の常連会員であり同時に学内新聞「駿台新報」の編集にタッチ、特に最後の一年間はその学芸欄を全面的に取りしきった。耕一は学芸部員をよく自宅での昼食に誘ったといわれ、これらを通して篤

三は耕一の影響をその後も受けることになる。卒業後の彼が、新聞紙上の畑耕一の劇評を代筆したことがあるなど伝えられるのもその一例といえよう。

豊かな家計のもと自由時間を満喫していた篤三の生活が激変するのは、昭和14年から15年にかけて。一つは昭和14年7月8日公布の「国民徴用令」で、篤三もいわゆる〈徴用逃れ〉のために遠縁の叔父の経営する化学会社（武内工業（資）、城東区北砂町2丁目31）に勤めるようになる。もう一つは家庭生活面で、浅草馬道の寝具商丸山光太郎の次女・ひさ子と結婚（昭14・1・25）、実母きみ死去（昭14・6・3）、長女・美和誕生（昭15・1・5）、妻ひさ子死去（昭15・3・30）と続く。篤三は長女を足利にいる異父兄（峰岸益三）夫妻に預け、平日は会社に出勤、日曜は足利へ、という生活に入る。

彼の生活が平常に戻るのには、昭和16年も秋深くなつてから。同年10月6日、足利の呉服商曾根富次郎の長女で従兄妹に当る隆子と再婚、美和も手許に引き取る。昭和19年2月8日、次女・彌栄誕生（註2）。

しかし昭和20年3月10日の東京大空襲で

浅草全区は全焼、たまたま足利の曾根家に  
いつていた美和は助かったが、他は全員罹  
災。隆子と彌栄の死体は、隆子の弟・章夫  
が篤三の自宅に近い富士公園内の防空壕の  
中で発見したが、篤三は行方不明のままで  
終った(註3)。隆子と彌栄の遺体は章夫  
の手によって引き取られ、篤三の遺品と共  
に曾根家の菩提寺、心通院に葬られた。賞  
月院篤運了学居士、八巢篤雄、詠華院隆運  
妙昌大姉、八巢隆子、彌天栄光孩子、八巢  
彌栄子。篤三の享年43。

(註1) 台東区役所調べによる。ほか  
に、明治大学調べの明治36年6月1日生が  
ある。

(註2) 左掲は「多麻」昭和19年5月号  
の編集後記「多麻雑記」の坂口有漏男筆に  
よる篤三像。俳誌に載る篤三の消息として  
最後のものと思われる。―抜粋―

先達てめづらしく警視庁女関の真ん前  
で高篤三さんにお逢ひした。はじめ遠く  
から見かけた時よく似た人とは思つた  
が、いつも白足袋、角帯の瀟洒な高さん  
にしかお目にか、つた事のない僕は、戦  
斗帽を少し横かぶりして、巻脚絆の至極  
颯爽たる姿に言葉をかけられ一寸面喰つ

た形だった。話をきいて見ると此処で逢  
ふのに何んの不思議もなくお互ひ工場関  
係の同じ用件で、労政課の分室にある給  
食聯合会へ、工場員の米だの味噌だの、  
配給券を貰ひに来たと云ふ訳である。  
(中略) 二言三言立話の後、別れ際に、  
「戦斗帽もなかなかよく似合ふぢやあり  
ませんか」と防空服装に敬意を表した  
ら、わが敬愛する浅草の詩人は、少々て  
れた様な笑ひを見せ乍ら「あんまりみん  
なに喋るなよ」と赧い顔をしたものであ  
る。

(註3) 篤三の焼死場所を伝える二文章  
がある。藤田初巳「篤三と青柚子」と安住  
敦「柿ノ木坂だより」(いずれも既掲)。藤  
田「隅田公園に累累とうちかかさなる惨死体  
のなかに、若い妻とおさない子どもをだき  
かかえた高篤三のなきがらがみいだされ  
た」。安住「彼は自分の家の庭にしつらへ  
た防空壕の中で、妻と子と三人抱き合つて  
真ッ黒こげに焼けてしまつてゐたのであ  
る」。これらが真実を伝えたものでない。  
とは、今回の作業の過程ではつきりした。  
註を添え訂正しておきたい。

## 2 その俳優

東京本郷駒込の徳源院は八巢家の菩提  
寺。そこには桜井蕉雨(八巢)の墓や八巢  
謝堂筆の蕉雨句碑があり、その八巢家墓域  
には八巢謝徳の墓標、句碑もある。篤三が  
幼時から「俳句」という言葉を耳にしなが  
ら育つたことは間違いないが、彼がいわゆ  
る俳句結社に属したのは彼の師・畑耕一が  
「ゆく春」の有力同人の一部と共に創めた  
「海蝶」の創刊同人が最初。この創刊同人  
には伊勢喝象(勝蔵)、村尾蕉冥(太郎)  
らの弁護士がおり、同じ弁護士仲間の湊楊  
一郎(久々湊与一郎)の所属する「句と評  
論」と同人の相互乗入れ話が成立、「海  
蝶」創刊の昭和9年4月には、篤三は「句  
と評論」の同人にもなった。

篤三のいわゆる俳号は、八巢篤(昭9・  
4)9・10)、高篤一(昭9・11)10・  
8)、高篤三(昭10・9)と推移する  
が、本稿では篤三のみを使用。

また篤三はいわゆる雑詠選はいっさい受  
けず同人作品欄に直接発表したが、これは  
「海蝶」「句と評論」のみならず、その後  
の関係誌すべての場合にいえることであつ

た。

以下、篤三の俳歴の主なものを列記する。

(一)早くから新興俳句系の作家として注目された。彼は「句と評論」の同人として新俳話会にも出席、西東三鬼は昭和10年度の俳人の中に彼の名をあげ、「芝火」(昭10・12)、渡辺白泉は「亡鳳之記」(「傘火」昭11・11)の中で「おのれ以上」の七名の一名に彼を入れ、傘火第一回新人作品コンクール(昭12)では審査員の一員をつとめる。

(二)「句と評論」内部でも有力同人の一人で、同人選欄「第一作」の選を担当、句と評論第一合同句集「新暦」(昭12・4)ではその装幀を受け持った。「句と評論」が「広場」と改題(昭13・5)以降はその委員となる。

(三)「海蝶」では、俳句作品の発表は当初だけだったが、世話人の一人として課題句選、エッセイの寄稿、サロン欄への投稿、座談会への出席、原稿の斡旋(馬場孤蝶「一葉の住みし町のことども」昭12・10、13・1)などを続けた。しかし次第にその

回数が減り、海蝶との関係は定例会会への出席でいどなくなっていったが、句会場だった浅草神吉町の幡随院が炎上(昭13・12)、会場が変わるに及んで「海蝶」との縁は薄くなった。

(四)篤三の俳歴の特徴は、詩人が編集発行する小冊子への参加で、「ポエチカ」(大14・2、昭19・5、代表・田中進)、「月曜—春聯—月曜」(昭7・1、15、不詳、代表・井上多喜三郎)、「風流陣」(昭10・10、19・5、代表・岩佐東一郎—八十島稔)などがある。

「ポエチカ」は畑耕一の紹介。耕一は同誌に昭和7年3月号から俳句を発表し始め、篤三は10年5月号から。耕一は14年4月号、篤三は16年3月号で発表を止めている。

「月曜」は、「春聯」時代の昭和11年11月発行の第3号から。当初は「句と評論」の若手らも発表していたが、間もなく篤三だけになった。「月曜」10号(昭15・7)までの発表は確認できるが、それ以後は刊行の有無そのものが不明。篤三の「亡き妻に」捧げた句集「寒紅」(昭15・8刊)は月曜発行所刊。

「風流陣」は、「句と評論」の藤田初巳が岩佐東一郎と以前から親しかった関係で当初しばらくは初巳が時おり俳句や随筆を寄稿しているだけだったが、第25号(昭13・1)頃から篤三との交流が始まり、14年には篤三が「風流陣俳句文学叢書」(句集シリーズ)の書評を誌上に寄せるなど年を追って関係は深まった。篤三による俳句や随筆の発表は、19年5月最終号まで続いた。

(五)他の新興俳句系誌への寄稿。主として随筆の寄稿を、「傘火」およびその編集長だった朝倉南海男紹介の「新大陸」(のち「俳句文学」(昭14・6、不詳)、渡辺白泉の「風」(昭12・5、13・4)、横山白虹の「白鳴鐘」(昭12・1、14・7)など)に行っている。特に「芝火」(昭7・2、19・8)「旗艦」(のち「琥珀」(昭和10・1、20・4、5合併号))への寄稿は数も多く、かなり継続的でもあった。前者は句と評論東京句会で知り合った八幡城太郎(芝火編集)、後者は城太郎紹介の安住敦(旗艦編集)との縁によるものとみられる。なお「琥珀」から分れた敦らの「多麻」(昭19・1、20・2)には篤三の寄稿はないが、その一部同人との人的な交流は



続いた模様。また城太郎、敦は、篤三を介して岩佐東一郎、那須辰造、正岡容らのいわゆる文汎（文芸汎論）グループと知り合った。

(ハ)「広場」退会と「風流陣」への没入。昭和14、15年の環境激変の中で、篤三の俳句活動も変った。篤三の「広場」への投句は、同誌14年9月号の「盆まへ」7句が最後となり、翌15年は随筆を一回（9月号）発表したただけだった。（15年中の他誌への寄稿は「月曜」「新大陸」「旗艦」「芝火」など）。逆に風流陣グループとの親交に深まりがみられ、風流陣納涼句会（昭和14・8・12、於八十島稔居）、同彼岸句会（昭和15・9）、定例句会（同10・11月）に出席している。「風流陣」第46号（昭和15・12）には「秋風」2句を発表、同号の通信欄「風流春秋」には「私は竹々亭（八十島稔のこと）引用者、茶煙亭（岩佐東一郎のこと）同）の旦那にあやかつて今後河童亭と称しましょう。どうかよろしく」などと書いて全く「風流陣」の一員になりきった。「広場」16年1月号巻頭「謹賀新年」欄の同人中に篤三の名はなく、「風流陣」の同月号編集後記には、今後高篤三が

手助けしてくれる旨の記述があるから、篤三は昭和15年の秋ごろ「広場」を退会し、作品発表の中心を「風流陣」に移したと思われる。事実篤三は、次のように第46号以後ほとんど毎号、俳句かエッセイのどちらかを同誌に発表した（数字は号、○印はエッセイ）。

46、47、48、49、50、51、52、53、54、55、56、欠、58、59、60、欠、62、63、64、65、66（最終号）（56・66は随筆併載）

(ト)以上のように、篤三の俳歴は、昭和15年を境にして前半を〈句と評論・広場期〉、後半を〈風流陣期〉と大別できるところである。なお、昭和15年2、5、8月のいわゆる京大俳句事件、翌16年2月の「広場」「土土」「俳句生活」関係者の検挙などの影響は不明。

(チ)篤三の句集としては、既掲の『新暦』『寒紅』のほか『少年河童』（昭和16・6刊、教材社『現代名俳句集第2巻』所載）がある。その他、合同句集『出発』（昭和14・農林省蚕糸局糸政課内蒼空会刊）、手作り句集『少年』（昭和13）、同『浅草人』（不詳）の書名が誌上に見られるがすべて

未見。また「青芝・高篤三追悼特集」（昭和29・3）には、「河童亭高篤三句抄」が載っている。

## 二、その随筆と俳句についての素描

別掲の（表1）は、篤三の俳句、詩、随筆の発表状況。篤三にはこのほか、自由投稿欄への文章などがあるが、これは必要に応じ触れていくことにしたい。

（表1）によって取りあえず確認しておきたいことは、(イ)篤三の作句期間は足かけ十一年間であること。(ロ)篤三の俳句、詩、随筆の発表は、その回数のみからだけ見ると、それぞれ90、9、91で随筆が俳句を上回っている（註1）、従つて篤三の全面的理解のためには随筆もみる必要があること、の二点。

従来、篤三の随筆はほとんど紹介されていないので、まず随筆から始めたい。

### 1 その随筆

（表1）の中の「その他」の項の具体的な寄稿先について。

(a)、昭和11年〜13年の3年間を通して見

(表1) 高篤三の作品発表状況 (○は俳句、□は随筆、△は詩、数字は回数)

発表誌	海 蝶	ポエチカ	句と評論・広場	風流陣	その他
昭 9	③		⑧ ①		
10	⑤	⑦	⑧ ①		
11	① ②	④	② ⑪		① ④
12	① △	⑥ △	⑨ ⑥		③ ⑦
13	①	② △	⑥ ④	①	① ⑨
14		② ①	⑥ ① △	① ②	② ④
15			①	①	① ④
16		①		⑤ ④	⑥
17				③ ②	⑧ △
18				③	④
19				② ①	① ①

(備考) 随筆にはアンケートへの回答を含む。

(表2) 高篤三の随筆のテーマ別状況

テーマ	俳句・俳人 (含 追悼)	書評・句評 その他	映画・演劇 その他	時事	浅草 子供	先祖 身辺	課 題 その他
昭 9					1		
10	1		4				1
11	7	10	4		1	2	1
12	1	8	1	1	1	2	3
13	1	7 (+4)	2		2		4
14		2	4	2		1	
15		2	1	1		2	
16		3	3		4	2	
17		7			2	1	
18		2			1 (+1)		1
19		1					1

(備考) 13年の( )は「広場」の「廻転木馬欄」のもの、18年の( )は「青芝」29、8掲載のもの、「課題その他」はアンケートへの答などの小文および一般随筆

てみると、交蘭社版「俳句新聞」(昭11・1・1〜15・9・15)への寄稿が昭和11年に3回、13年に4回ある。篤三は畑耕一宅で持たれる小唄の会で、俳句新聞発行の交蘭社飯尾社長と顔馴染であった。そのほかでは、「傘火」3回、「風」「帆」各1回でこれらは新興俳句系のいわば僚誌。それに既出の「月曜(春聯)」への寄稿が8回。

(b)、昭和14年以降は寄稿先が変化し、同じ3年間を取ってみると、昭和14年〜16年は、「自鳴鐘」「新大陸」各1回のほかは「芝火」4回、「旗艦」琥珀」4回、「文芸汎論」3回、「月曜」1回となり、先きに触れた文汎グループ・風流陣グループ(「月曜」の井上多喜二郎も一員)に八幡城太郎、安住敦を加えた新しい人間関係の成立がみえ始めている。

(c)、続く昭和17年〜19年の3年間は「文芸汎論」1回、「芝火」2回のほかはすべて「琥珀」への寄稿。敦との関係の深まりをみる事ができる。尤も「琥珀」10回のうち5回は「万太郎俳句鑑賞」が占めるが、これは後でもう一度触れるはず。

「風流陣」は総ページわずか16頁という小冊子だったから、「琥珀」は篤三にとって

少しまとまったエッセイを発表できる唯一の場ともいえた。

以上「その他」に含まれる寄稿先の具体的な内容は、「俳句新聞」を除き新興俳句系誌であったのがわかる。次にこの「その他」に「海蝶」「ポエチカ」「句と評論」「広場」「風流陣」を加えた彼の全随筆を、テーマという点から見てもみよう。(表2)は、その年別一覽(一つの随筆が、例えば前段演劇評、後段句評で構成されている場合には、テーマは二つとしてカウントしたので表1の数字とは一致しない)。

特徴を項目別にあげるとまず「浅草・子供」。具体的な内容は、浅草の年中行事のほか浅草についての思い出など。思い出の中には彼の少年時代が多く登場するので、少年一般についての随筆もすべてこの中に含めた。「先祖・身辺」―彼は学生時代、「藤尾太郎」のペンネームで「駿台新報」にエッセイを書いているが、その中の一編に「蕉雨句集みて」がある(昭4・9・21号)。彼はその後、八景蕉雨のほか彼の先祖のことも何度か随筆化している。また「母ひとり子ひとり」時代には「母」を、また家庭環境激変期にはそれらのことをテ

ーマにしてエッセイを書いている。これらを一括したのがこの項目で、いわば篤三の血縁的側面。これに対して前記の「浅草・子供」は地縁的テーマと言っていいかもしれない。そういう事でいうと「映画・演劇その他」の項も、篤三の場合には地縁的側面の性質が濃い。彼の家のすぐ近くに宮戸座があったので、彼は子供の時から芝居の内容を真似て遊んだと随筆に書いている。浅草六区も近く、大学時代には演劇に詳しい畑耕一の指導を受けたので、彼は映画・演劇が単に好きというだけでなく一家言をも持つようになった。彼にこの方面のエッセイが多い背景である。「駿台新報」における藤尾太郎名のエッセイで最も多いのも演劇関係―「近松と心中の咄」(昭4・11・2号)、「人形芝居」(昭4・12・14号)、「十一月の歌舞伎座雑感」(昭5・11・8号)、「人形芝居の挿咄」(昭6・1・24号)など四編がある(彼は卒業後も一年間近く同紙への寄稿を続けた)。「書評・句評その他」の項で注目されるのは、「万太郎俳句鑑賞」―「琥珀」昭和17年5、7、8、9、11月号に連載された。篤三の書いたものでは、最も長編といえよう

(のち「春燈」(昭28・1・2)に大半が抜粋転載)。万太郎俳句の鑑賞という形をとりながら、下町や浅草に対する篤三の思いがにじみ出ているのが特徴。「浅草・子供」の項の中に入れてもよいほど。総じて篤三は、「そもそも俳句とはは……」といった調子は苦手なようで、俳句について語っても直感的、箴言的。例えば

今日までの俳句はタレントで作られてみなかつた。さう言つて叱られるなら、タレントで作られたものが少なかつた。

テンデンシイでの創作だつた。今日から、いや明日からはさうはいかなくなるだらう。(「句と評論」昭11・1)

といったものから、「あなたの作句発想法は？」というアンケートへの答え―

俳句になる領分のテーマをさがします。さがせたら俳句に書きます。(「芝火」昭19・1)

に至るまで、ずっと変わっていない。筆づかいそのものがエッセイ向きといえよう。中で注目されるのは「雑感」(「句と評論」昭11・12)、後で詳述する。「時事」の項も後述。

## 2 その俳句・詩

(表3)は、篤三の俳句の「初出」の状況を一覧化したもの。句集または雑誌に発表された作品のみを対象にし、句会だけの発表のものは除いてある。この表から確認しておきたい諸点<sup>1)</sup>。

(a) 篤三の発表句数は、全体で160句をこえていること(この表は、(註1)で例示したように実物を確認できた作品のみをカウントした。従って実際の発表数は、これにプラス・アルファしたものになるう)。

(b) 初出句は、「句と評論・広場」が最も多く、次いで「風流陣」、「ポエチカ」と続くこと。

(c) 「句と評論・広場」への発表は昭和14年が最後でその後は「風流陣」が中心であること(既述)。

(d) 昭和15年以後の発表のものは他書誌には未掲載が多く、従って、発表の当該誌以外での接見はかなりむずかしいこと(それ以前の作品のうち主要なもののは大半は、『寒紅』『現代名俳句集第2巻』に収録されているとみてよい)。

篤三の俳人としての歩みは、試作期と本格期に大別できると思われる。八巢篤・高篤三と改号した昭和10年9月号以降しばらくの間、彼は同一のテーマと題で同一の作品を「句と評論」と「ポエチカ」の同月号に同時に発表している(「秋の少年」(4句・9月号)、「秋風」(3句・10月号)、「人間」(2句・12月号)のがその象徴。

そこには篤三が、自分でも納得した行き方をつかんだ、という姿が感じられる。篤三の俳句を見る場合、この本格期以降を対象にすればよいように思われる。それは、試作期の作品を無視するというのではなく、その期間の作品のうち、本格期以後に再発表されたものは本格期の中に加えて把えるという意味である。

具体的に初発時の二ヶ月の作品について例示する。俳句の下の記入は掲載書誌の略称、数字は年・月号。略称は次の通り。

- ㊦ 句集新暦、㊧ 句集寒紅、㊨ 現代名俳句集、ポ ㊩ ポエチカ、陣 ㊪ 風流陣、句 ㊫ 句と評論、セ ㊬ セルパン、春 ㊭ 春聯、月 ㊮ 月曜、広 ㊯ 広場、海 ㊰ 海蝶

「句と評論」昭和9年4月号

- ① 草鬪や女には女の句あり
- ② 目つぶりて春を耳噛む処女同志

「海蝶」同・同

- ③ 春愁や感化院の少女のそら泪

- ④ 海へ出る早の道のつづきけり ㊦ ㊧ (ポ10・5)(句12・6)

- ⑤ 私立の子公立の子や海嵐廻し ㊦ ㊧ (ポ12・1)(春12・7)(句12・11)

- 「句と評論」昭和9年5月号

- ⑥ よるこばず踊れり風邪の踊子も ㊦ (春12・3)(陣16・11)

- ⑦ 沈丁のゆふべ女になりし悔(ポ11・4)

- 「海蝶」同・同

- ⑧ 六月の海の碧さにポスト塗る ㊦ ㊧ (句10・5)(ポ10・5)(セ12・8)

- ⑨ 久闊を海へ手挙げぬ七月の(セ12・8)

- ⑩ 驟雨来水着の男女おし合うて

以上の例でいえば、④⑤⑥⑦⑧⑨は篤三の作品として考察の対象にする(句形に変化があった場合は、本格期に入って発表されたものに従う。例えば⑦の「ゆふべ」は当初「夕」、⑨の「手挙げ」は「手あげ」だった。また後日、「前詞」の付いた⑤の「たけくらべ抄」、⑥の「カジノ・フオウリ」は「前詞」の付いたものを採用)。

(表3) 高篤三の俳句の初出句数の状況 (□は他誌には未掲載) (単位・句)

書名 誌名	海蝶	句と評論 ・広場	ポエチカ	春・聯 ・月曜	風流陣	芝火	俳句研究	句集 寒紅	現代名 俳句集	計
昭9	6□	14□								20□
10		16□	3□							19□
11		2	7							9
12		10□	9	1						20□
13		10□	1		2		1			14□
14		20□	1		1□		13□			35□
15				2□	2			3□		7□
16			3□		13□				2□	18□
17					7□					7□
18					8□					8□
19					9□	1□				10□
計	6□	72□	24□	3□	42□	1□	14□	3□	2□	167□

(備考) 同月号に同時発表のものは「句と評論」に算入

(表4) 高篤三の俳句のテーマ別状況

テーマ	風日	景常	風浅	俗草	女・乙女 少年・少女	絵幻	本想	母夫	子婦	社会
昭9	9	7		2	4					
10		5			9					2
11		1			7					1
12		5		6	9					
13		3			7		3			
14		5		1	5		14		10	
15		3		5	3				1	
16		5		7	2				1	
17		2		3	1					
18		1		7						
19		3		5					2	

以上のやり方で試作期から揃いあげた作品を、本格期のものに加えた計157句。それをテーマ別に一覧化したのが(表4)。テーマ別にしたのは篤三に「テーマをまづ考へて俳句する癖のある僕」「俳句する詩ごころの興るテーマを捜すのに苦心する」などの言葉がある故(「句と評論」昭11・12)。

(表4)によりながら篤三の俳句の特徴をみてゆく。

水の秋Laureninの壁なる画<sup>㊦</sup>

南風は鏡の中に魚となる<sup>㊦</sup>

桜草はおよそ運河を想ふ花<sup>㊦</sup>

啄木鳥は頭上に飛んで生臭き<sup>㊦</sup>

寒鯉に触るれば<sup>㊦</sup>と甕の中<sup>㊦</sup>

栗拾ひつ、つまらなくなりにつけり<sup>㊦</sup>

スクラムをいつまで蛸蚪かな<sup>㊦</sup>

かはり玉含みつ春の愁かな(陣16・7)

波音のきこえて松葉牡丹かな(陣16・

8)

まつ毛ふく風ありにけり桜餅(陣17・

5)

真夜中の雛あかあかと在はしけり(陣

19・5)

これらが「風景・日常」の項に入る。西

欧的感性とユーモア、それらが日本の情緒と融け合っていく過程がうかがえよう。これらはいわば篤三的世界の基底で、その上に次のような篤三的テーマの世界が構築される。まず「風俗・浅草」の項――

浅草は風の中なる十三夜<sup>㊟</sup>

富士市の昼<sup>㊟</sup>と水機関<sup>㊟</sup>

夜学の子二天門にて別れけり(陣17・

9)

富士市のしづまればはや明易き(陣18・

9)

などあげればきりがながい、作品的には前の二句がピークであろう。「十三夜」は、句と評論東京句会(昭12・6・12、於交詢ビル)での出句が最初。誌上发表は(ポ12・6)(句12・7)(広14・8)の順で、のち「寒紅」「現代名俳句集」にも収録、篤三の代表作となった。「富士市」は当初、「かたかた」の形で「ポエチカ」12年6月号に発表され、「広場」14年8月号で「Takaka」となり、「寒紅」「現代名俳句集」ではローマ字で登載。なお、浅草を書いた

鶯や象潟町の三味線屋(陣19・5)

春の雪観音堂の朱さかな(ク)

は、篤三の誌上发表句の最後のものと思われる。

「女・乙女・少年・少女」の項、特に「少年・少女」は、篤三が意識的に対象とした世界といえよう。彼は

僕は句を作る時よく少年や少女の世界を俳句する。それがなんだか作り易いからである。

と書いている(「句と評論」昭11・12)。具体的な作品――

てのなかのいなごはうごくかぜのなか(句10・9)(ポ10・9)

薫風に少女は赤き舌を出す(句11・10)

算盤の古く重たき秋の風(ポ12・1)

秋白くSimone Simon と病む少女<sup>㊟</sup>

これらはそれぞれ、標題「秋の少年」「[EAN COCTEAU]」「たけくらべ抄」「白い室」が付く。また「おかる・みうり」の前詞のある

春風の馬車は狐の駆れる馬車<sup>㊟</sup>

の上五「春風の」は、初め「プリムラの」で発表され(句と評論句会11・3・29)、次に「桜草の」となり(ポ11・6)(句12・

3)、渡辺白泉などは「桜草」を「プリムラ」と読んで鑑賞している(「風」昭12・

6)。

北風の少年マントになつてしまふ(句13・3)

にも「少年独楽を買ふ(東童)のH・W君」の前詞がある。篤三の「少年・少女」の句は、いわゆる写生でなく、イマジネーションの世界で出逢う少年や少女を発想の

起点とするとき秀れたものになるようだ。これは、篤三の俳句に「絵本より」という

前詞で、「烏天狗」や「河童」が登場するのと無関係ではないだろう。「絵本・幻想」の項から――

Buu Buu と烏天狗は来るらし(広13・

11) 仲見世やいつかつれだつ河太郎(広14・

2) Qurr Qurr とニュース映画に叫ぶ河童(広14・6)

次は「母子・夫婦」の項――母ひとり子

ひとりその母の死は、「盆まへ」7句の発表となるが、これが「広場」への投句の

最後で、以後は「風流陣」が中心になるのは既述した通り。

母病みてやさしく春を待つ夫婦(広14・

4)

梅雨かけて母の三七日五七日(広14・9)

風邪の子に早目に雛をかざりけり(陣19・5)

「風邪の子」の句は、「雛祭あとさき」5句の中の一句、「風流陣」最終号所載。

最後の項「社会」については後述。

終りに、篤三の「詩」について。 (表1) に見るように、彼の発表した「詩」は少ない。それも二編は、全く同一のものでただ発表誌が異なるだけ。これを相殺すると、実質的には七編。題名は、「Kちゃん」(ポ12・10)、「秋風の葉書—北支へ行くH君—」(海、ポ12・12)、「氷水」(「浅草にて」(ポ13・4) (広14・8) 「家庭」(ポ13・9)、「Warming-up」(ポ15・4)、「親子」(琥珀17・1)、「少年馬上」(芝火17・2)。テーマ別になると、浅草もの一編、親子・少年もの二編、他の四編は戦争下の友人(「Kちゃん」)、姉弟(「秋風の葉書」)、妻子(「家庭」)、子供(「Warming-up」)を題材にしたいわば社会もの。これらも後で触れることがある。

(註1)(表1)の「その他」の項の数字は未確定のもの。此処には、例えば俳

句では正岡容「李彩供養」(同「寄席窓

慕帖」所載)に載る(へはなやかに李彩小

李彩更衣)や「河童亭高篤三句抄」(既

掲)中の(浅草に生れちりぢり別れゆ

く)ほか二句などは、その初出が確認で

きないのでカウントしていない。また随

筆では「俳句文学」創刊号(「新大陸」

の後身)の篤三の句集評(朝倉南海男句

集「坂」を「俳句研究」(昭16・3)誌

上の広告でしか知りえない理由から除い

てある。こうしたことを含め、まだまだ

目の届かないものがあると思う。ただ

そうしたものの数は少ないと思われるか

ら、この表を以ておおまかな傾向は把握

えよう。その他の表も同じ。

### 三、自由主義者としての篤三

正岡容「高篤三断片」(既掲)に、次の既述がある。

意外におもふだらう彼、高篤三の、嘗て私と交らざるその以前には、左翼の闘士で激しく吏に迫られたことさへあったのだつたと云つたなら。

この正岡容の言い方になぞらえれば、次

のようなことになろうか。

意外に思うだろう。(浅草は風の中な

る十三夜)の作者、高篤三に

ストーヴや小林多喜二(今に生く

なる作品があったと言つたなら。

これは昭和13年2月8日の海蝶俳句会で

の彼の出句。兼題「煖炉」。句会報の中に

彼の自選句として出ている(「海蝶」昭

13・3)。以下、彼をトータルとして理解

するために、そのいわば思想的、社会的関

心の在り様を見てゆきたい。

(イ)、学生時代の彼は、単なる文学青年でもいわゆるノンポリ学生でもなかった。

「駿台新報」に(藤尾太郎)名の(時事

関係の文章が二編確認できる。「反動の標

本—検閲—」(昭4・11・30号)と「ある

「撃滅」(昭5・4・26号)。前者は、映

画や演劇に対して当時実際に行われた(検

閲)の例をいくつかあげて、「とにかく現

在の如き無理解な検閲制度は甚だ遺憾だ」

と締め括つたもの。後者は、「日活特作品

と銘打つた、海軍省後援軍国主義映画「撃

滅」を観た印象記。彼はその「素晴らし

い宣伝振」を揶揄したりしたあと、次のよ

うな文章でこれを終える。

やつと映画になる。日本海海戦のシーンだ。(中略) つゞいて工場に農村に動員令が下る。出征だ、出征だ。「御国の為だ」と列車の中へ入れられる。ハンマーを、鎌を捨て、銃をもたされて「どうして」「何のために」……そんな事はどうでもい、喇叭と万歳に有耶無耶の中に送られてしまふ……。あとはいふにしのびない。

この二編のエッセイは、一つは〈表現の自由〉の主張を踏まえており、いま一つは〈反軍国主義〉の上に立っているといえよう。既述のように篤三は別に、「駿台新報」に演劇関係のエッセイを四編書いている。また句集についても一編書いている。こういうことも含んで彼の〈反軍国主義〉をみてみると、彼のそれは〈文化主義〉〈教養主義〉を基礎としているように思える。彼は明治34年(一九〇一年)生れ、その頃の年代の多くの青年達と同じように大正デモクラシーを精神的土壌として成長したといえよう。マルキシズムからの影響はわからないが、彼が「市民的自由主義者」「文化主義的・教養主義的自由主義者」すなわち〈大正デモクラシーの徒〉であった

ことは確かだと思われる。

(四) 〈大正デモクラシーの徒〉は、その後さまざまの歩みをしたが、篤三は生涯「自由主義者」であり続けた。次にそれを見る。

(a) 昭和10年3月号「句と評論」に発表された作品。

今日一月十五日はカールとローザの記念日です。

ストープやカールの如く死せし友を  
ストープやローザは女性なりけるに

これは翌11年1月号「ボエチカ」に

ストープやマルクスを読みシエストフを加えて再度発表され、その時には題名が「自嘲」とされた。のち句集「新暦」(既掲)では「ストープ」と訂正されたが、題名は残された(句集『葉紅』『現代名俳句集』には不載)。当初の発表時は〈高篤一時代〉、二度目からは〈高篤三時代〉つまり彼が俳句作家としてある踏ん切りを感得した時代、その時彼が「自嘲」という題を付けたことを注意したい。彼が「駿台新報」の学芸欄の編集を担当した昭和4年、5年、カールとローザへの追悼記が載っている。「カール、ローザの十周年を迎えて

／道瀬幸雄」(昭4・1・19号)「カールはローザはノイ追憶は火花して／木村賢一」(昭5・1・18号)。彼が「自嘲」と題した時、彼は自分をカールやローザと対せしめただけでなく、彼の若き日のことどもや友人達をも思い出していたのではなかったろうか。

(b)、「海蝶」には「夜の灰皿」といういわば自由投稿欄があり、篤三は当初からの欄の常連だったが、その中の一つから(昭11・1)。

第一書房といふ本屋の主人が……今日までのマルキスト達が無学で考察が一面的で「馬車馬的」だと言ひ、……「敢然」としてこれに反対する態度をとつて、マルクスに関する書物は一冊も出版しなかつた」と言つてゐる。氏は何故今日になつてはじめて「敢然」とこんなことを言ふのだろうか。……この一時的反動時代に、いつしよになつて遠くから唾をかけるやうな人達の態度を僕はにくむ。

(篤)

彼が「にくむ」といつているのは、時局追隨的言動に対してであり、この辺りにも自由主義者らしい潔癖さが出ているように



思える。

(c)、時代は、二・二六事件（昭11・2・26）を経て日華事変突入（昭12・7・7）となる。戦争を見る彼のクールな眼は変らない。「上海に於ける支那戦線」というニュース映画を観ての感想（「句と評論」昭12・12）。

アナウンサーの解説が同感出来ないのだ。女学校襲撃の報に進む支那兵に、女学校と聞いて得意になつて駆けつけるのだ、習性の歩行ぶりのそれだけに對しての揶揄の言葉だの、ナンセンスに近いと言ひたい。：

また、彼に中国の子供を詠んだ句がある。

すかんばや支那の子供はかなしから

これは「風流陣」昭和13年4月号が初出、翌月号の「広場」にも発表されて評判になった。「寒紅」では、「亡き母上の云ひ給ひき」という前詞付きになつてゐるが、これは単なるレトリック。それよりも、前記のニュース映画への感想を含むエッセイ（感想「三三」）の最後のところに次の短文があり、その方がこの句に関係が深いだろう。

……詩人黄瀛氏が戦線で漢奸の名の下に拳銃で射殺されたといふ……僕はかつて大学の新聞を編輯させられてゐた時、芸欄へよく同氏の詩を寄稿してもらつた。……

確かに昭和3年から4年にかけての「駿台新報」には黄瀛の詩二編、隨筆三編が載つてゐる。黄瀛射殺の報に彼は戦争の非情さを実感しようが、「支那の子供はかなしから」と詠んだ彼の心の中では、黄瀛のことが重なつてゐたに違ひない。

(d)、彼は戦争を一貫して庶民の側の眼で見つづけた。先きに彼の詩は戦時下の友、姉弟、妻、子供を書いたものが中心であることを記しておいたが、ここでは最も短い「家庭」（「ポエチカ」昭13・9）を例示する。

灯取虫が燈を困つて離れない……

戦地の夫の身が思はれて 彼女は一人つぎりの男の子の 両手を握つてしきりと、面白のお話をしてやる。

彼の視座は、隨筆に於ても同じ。例えば「東京駅にて」（「ポエチカ」昭14・9）「無題」（「月曜」昭14・12）。この二編は、題は異なるが内容は同一。

応召の友人を見送りに、東京駅へ行つた時だつた。（中略）其処此処で、出征の兵隊さんを送るひとびとの群で万歳が叫ばれ歌が歌はれてゐた。さうした群集からとほく、ひとりの白衣の兵隊さんが、バスの車掌さんである制服のひとつだけだつて、静かに語りあひながらあゆんでゐた。他のなにもにも関はりのないやうに静かにあゆんでゐた。（後略）このほか隨筆「あたたかさ」（「芝火」昭15・12）は、〈金供出〉にからんで戦時統制経済政策の画一性を、庶民の場から難じたものだった。

(e)、戦争はやがて、対米宣戦布告へと拡大するが、緒戦の勝利を含めて彼は遂に戦勝を讀める俳句を書かなかつた。彼は昭和15年12月発行の「風流陣」46号以来、毎号同誌に俳句が隨筆のいづれかを発表し、休載は57号と61号だけだった（既掲）。このうち、57号は大東亜戦争特輯。代表者格の岩佐東一郎、八十島稔はもちろん、篤三の親友岡容、那須辰造も参加して総勢24名、それに別冊付録・特輯家庭版まで付けての力入れ様だったが、これには彼は全く欠載。ちよつど彼は既掲の「万太郎俳句

鑑賞」を執筆中だったから、それにかまけて失念したのか、意識的に参加しなかったのか、それとも原稿が編集段階で没になったのか、その辺は全く不明だが、とにかくこの特集号には不参加であり、その後も戦勝に拍手は送っていない。むしろ、彼は荒廃してゆく戦時下の浅草に昔の面影を発見しようと努力し、古き下町が喪われていく事の方に関心があったようにさえ思える。

今夜は宵節句。浅草をかへると其処此処の家々で屋根に菖蒲を投げてゐる。夕間暮である。かうした景色のいつまでも残る浅草である。

浅草や菖蒲を屋根に投げゐたり

これは「宵節句」という題で「風流陣」63号(昭18・6)所載。次は第65号(昭19・1)の自由投稿欄「風流春秋」から。

今夜べつたら市を歩いて来ましたが、みるかげもないものです。お月様だけが綺麗でした。土地ツ子の知人が「べつたら市はもつと寒いはずのもの」と言つてゐました。しようちゆう八合配給あり。たのしいです。

#### 四、文芸人としての篤三

「駿台新報」収載の「近松と心中の咄」(既出)には、「僕のカムフラージュ」という副題が付いている。また八幡城太郎は、「篤三が」わたしを俳句で先輩と云ひ、自分では、俳句はデイレッタントの余技のやうな態度を見せてゐた。」と追想している(青芝・高篤三追悼特集)。たとえカムフラージュの世界やデイレッタントの余技であつても、それは独り歩きをし、それ自体の発展、充実を求める。彼が縁あつて俳句に関わりはじめ、しばらくの間の試行期(八巢篤・高篤一期)を経て自分の納得のいく行き方を見定めた時、高篤三と改号すると共に同一の題で同一の句を同月に「句と評論」と「ポエチカ」に発表したことは既に述べた。その作品は例えば

で、主要なテーマは「少年少女」。篤三は次のように言つている(「句と評論」昭11・12)

…僕は少年を愛する。愛する気持も本当だが、今日のやうに思ふことも、言へない自由のない時代だと、いきほひ少年や少年の世界へでも気持の妥協をもつてかないことには、テーマをまづ考へて俳句する癖のある僕は、さうでもないことには純粹な詩心が、花鳥諷詠の苦手な僕には、感激して来ないのである。だから僕は少年や少女の句をよく作ることになるんだ。(後略)(傍点―引用者)。

彼はここで、彼の少年少女の句は「自由のない時代」への一つのプロテストの表現だと語つている。彼は彼なりの方向を見付けたしたので、此の時(高篤三)と改号したわけである。ただ彼は、前記のこの同じエッセイの中で、もう一つの行き方に触れていて

しろさあききつねのおめんかぶれるこ  
(昭10・9)

秋風に向く兎の鼻は低かりき  
(昭10・10)

白の秋シモオヌ・シモンと病む少女  
(昭10・12)

どうもこの身辺り、リズムにじつくり気持をおちつけることがなかなか出来な  
い。(中略)やつぱりデツサンからやつてゐないからいけないのだらう(傍点―引用者)。

と書いている。これは彼が「句と評論」の仲間達とくくりに渡辺白泉から受けた影響による述懐といえる。篤三にとつて「身辺」とは「浅草」であつたから、彼はこの

エッセイを書いた翌年、「十三夜」や「水機関」の句を生み出すようになる。この後、「句と評論」の仲間達の主軸はいわゆる「戦争俳句」へと進むが、「自由のない時代」のプロテストのテーマとして「少女少女」を見定めた彼としては、この「少女少女」と身辺としての「浅草」との統合をめざすのがその歩みとなつていく。「少女少女」の世界は「絵本」や「東童」の世界となつて、それなりの作品を創り出す（既掲）が、それはあくまでも「絵本」「東童」といったいわば「非身辺性」を発想の起点としている。一方「身辺」としての「浅草」は「隅田川」となり「河童」の群になつていく。彼は「河童」群作が、「身辺リアリズム」であることを言うべく、河童の実在性をあれこれのエッセイに書きまくる。そして、その「河童」が、常に彼の「少年」時代と結び付いて語られるのが特徴的で、「河童」とは彼にとつて、プロテストとしての「少女少女」と身辺と

しての「浅草」との結節点であつた（その故に彼は、「現代名俳句集」所載の自選句群を、「少年河童」と名付けたのである）。

こうした彼にとつて、結婚、母死去、会社勤め、長女誕生、妻死去、再婚、次女誕生という環境変化の影響は大きかつたと思われる。その最大のものは、今まで「非身辺」であつた「少女少女」の世界が「身辺」化したことであり、そうすることによつて今までの「身辺」であつた「浅草」が新しい意味を持った、新しい「身辺」となつたことだつた。「浅草」は、プロテストとしての「少女少女」を内に抱撰することによつて、いわば「身辺」としての「浅草」は、プロテストとしての「浅草」に変わった。「自由のない時代」になればなるほど彼は「浅草」を書いた。「浅草」は彼にとつて、かつての「少女少女」と同じ意味を持つものになつていったから。

「浅草」が彼にとつて新しい意味と役割を持つようになると、彼の書き方にも変化が現われ始めた。彼は少し饒舌になつた。具体的には前詞が長くなつた。長くなつた前詞は、いわばショート・エッセイのよう

にそれ自体で一つの世界を持つようになり、それが俳句と結合することによつて、エッセイでも俳句でもない新しい文芸世界を形成するようになった。前出の「宵節句」もそうだが、句集「寒紅」には次の秀れた二作品がある。

母を亡くした二十のひとり娘が病んでます。男親は娘のために、冬ぞらの駒形橋を廻り道しまして……

百助へ丑紅買ひに廻りけり

\* \* \*

迎火に幼年うすき化粧けはひして

母を亡くした二十一の娘は、五歳の弟のやさしい姉であり、またあたたかな母親代りの彼女でした。父親と彼女と弟と女仲とで、母の新盆の迎火を庭さきに焚いてゐます。湯上りの弟に着替へをさせ、うすき化粧までさせて。芋殻が燃へて煙が流れます。おはぐろ蜻蛉がその周囲に、かなしい輪を描いてゐます。草のにはひがします。誰も黙つてゐるのです。

返信

浅草は風の中なる十三夜

「芝火」昭和19年2月号に「待春」という題で発表された次の作品群は、その題名

の象徴的な意味あいも含め、その時点の彼の作品として注目すべきものだと思われる。

湯屋はねて一家くり出す酉の市

店のはあびす講まで足袋ははけない。あかかか明るいこの夜は楽しい一夜だった。かうした古いきたりもなつかしい。

足袋はいて膳にむかふやあびす講

炭をつぐしずかな母でありにけり

極月の鶏あたたかく抱きけり

戦へる元朝固く顔洗ふ

浅草の娘はいふ。

針祭りみちせすにかへりけり

処用にて横浜へゆける車中。たまたま当夜の

句会の宿題「風車」の句を案じつつあれば

……

風車もつ子のあたり戸塚保土ヶ谷

暮春のころ古利根の町をあるいた。ねむつた

やうな町の午後の景色のなかに私は月おくれ

の雛祭を家ふかく見た。

古利根や町にはおそき雛祭

長い前詞と句、二つの句を長い後詞と返

信で繋ぐ構成、これらは篤三の一文芸人としての試行ではなかったか。彼の最後の

誌上発表作品（と思われる）既述の「雛祭

あとさき」5句の中の一句もまた、次のような長い前詞を持つていた。

二月八日奉戴日で針供養の日に生れた弥栄のもう初節句である。五歳の美和と妻と義妹

と、きびしき時代に、なにはなくとも宵雛つ

つましい饗宴だ。男は自分一人、二合にたり

ないおしきせに、父はいい気持だったのだ

よ。

宵雛にわが家やさしき夕餉かな

その後、彼の前詞はもつと長くなつてい

つたかもしれない。いささかオーバーな言

い方ながら、彼のこの試行的作業は、芭

蕉、也有、蕪村などにもつながるものたり

得たかもしれない。しかし時代は間も

なく破局期に突入、篤三の肉体とタレント

のすべてを奪つてしまふ。

おわりに

永井荷風「火花」に、有名な一節がある。

明治四十四年（同年1月18日）「大逆事

件」被告に死刑判決（引用者）慶応義塾

に通勤する頃、わたしはその道すがら

折々市ヶ谷の通で囚人馬車が五六台も引

続いて日比谷の裁判所の方へ走つて行くのを見た。わたしはこれ迄見聞した世上

の事件の中で、この折程云ふに云はれない厭な心持のした事はなかつた。わたし

は文学者たる以上この思想問題について

黙してゐてはならない。小説家ゾラはド

レフェウス事件について正義を叫んだ為

め国外に亡命したではないか。然しわたし

は世の文学者と共に何も言はなかつ

た。私は何となく良心の苦痛に堪へられ

ぬやうな気がした。わたしは自ら文学者

たる事について甚しき羞恥を感じた。以

来わたしは自分の芸術の品位を江戸戯作

者のなした程度まで引下げるに如くはな

いと思案した。（中略）わたしは江戸末

代の戯作者や浮世絵師が浦賀へ黒船が来

やうが桜田御門で大老が暗殺されやうが

そんな事は下民の与り知つた事ではない

―否とやかく申すのは却つて畏多い事だ

と、すまして春本や春画をかいてゐた其

の瞬間の胸中をば呆れるよりは寧ろ尊敬

しやうと思立つたのである。

荷風は荷風、篤三は篤三。とはいえ荷風

のこの自画像は、「近松と心中の咄」に

「僕のカムフラージュ」と副題した篤三、

「カールとローザ」の句に「自嘲」と前詞を付けた篤三、「自由のない時代」に少女や浅草をテーマの中心に据えた篤三、河童の句やエッセイを書き「河童亭」と別号し浅草の自宅を河童亭と呼んだ篤三、とかなりのところで重なり合うように思え

る。

荷風は第二次大戦を生き抜いたが、篤三は夭折した。彼の長女・美和が罹災をまぬがれ、今では三女の母として幸せな主婦生活を送っていることだけがせてもの救いといえよう。